
宵闇猫と夜叉鴉の満月狂騒曲

neco@秘書検勉強中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宵闇猫と夜叉鴉の満月狂騒曲

【Nコード】

N8636U

【作者名】

neco@秘書検勉強中

【あらすじ】

ネコに気を付けろ……、とある街にはこんな噂が流れていた。ネコとは何か？
そして鴉という集団も現れ、彼らは今日も乱痴気騒ぎを起こして空を翔る！翔る！翔まくる！

これはネコと呼ばれた集団の、とっても下らない狂騒曲。
馬鹿馬鹿しくて少し哀しい話。

序章という名の序奏（前書き）

初のオリジナルなんで頑張ります。

序章という名の序奏

> i 3 3 7 3 5 — 3 6 2 1 <

— …おい、『ネコ』が来たぞ！

— …『ネコ』？いや、あれは死神だろ！？

— …そんなことあっていい！逃げるぞ！アイツらに捕まったら命がいくつあっても足りねえ！

— …そうだな、『ネコ』に見つかる前にとんずらかかなきゃ…にしても…

— …ん…？どうかしたか？

— …いや、あのネコって幾つ名前があるんだろっな？それにリーダーの正体も不明ときてる…

―…余計な詮索は命に関わるぞ。だって…

『ネコはそもそも存在すら曖昧なのだから………』

とある地方都市、そこにある古い喫茶店に一人の男が入った。

「いらつしゃい」

「……コーヒーと、何か食えるモン一つ頼む」

男は身なりからして旅人らしく、地図を広げて何やら探していた。
宿だろうか。

「あんた、旅人さん？」

マスターがコーヒーを出しながら男に聞いた。

「あ、ああ……」

「この町にはいつやって来たんだい？」

「つい先ほど…」

喫茶店のマスターは若い男。けれどもその顔には、年齢に不釣り合いの老成した笑みを浮かべていた。なんだか狐に似ている。

「じゃあ『ネコ』に気を付けな…」

猫、猫といえばネコ目食肉類ネコ科の哺乳類である。

男は首を傾げた。

「猫って…あの動物の？」

「いやいや、そうじゃなくて…この町の名物。ならず者の集団さ」

「はあ…」

「目立つたことしなけりや向こうから何もしないけど…。ネコには沢山の名前があるんだ。俺は『ネコ』と呼んでるが、違うやつは『軍団』や『義賊猫』、『闇猫』や『血みどろの黄昏』とも呼んでるねえ…」

「そ、そりやすげえな」

「ん。そうだね…まあ遠目から見れば安全だし、一度は見てお行きよ」

「会えればな…」

「会えるさ。会いたそうな顔してるよ、あんた」

「…？」

「ははは！冗談さ、だけど会えるのは本当だよ。何せ明日は満月だから…！」

マスターは笑う。

「はあ…じゃあ考えるよ。」
「馳走さん、お金はここに…」

「まいど！」

男は食事をさっさと済ませ、お会計をする。

「あの…」

「宿は3ブロック先だよ」

「おう、ありがとう」

「どういたしまして」

「じゃ、俺はこれで…」

男は店から出ていった。

マスターはカウンターで皿を洗う。そして奥の部屋の住人に呼び掛ける。

「ネコ、おいで。ご飯だよ」

奥から人がやって来た。

序章という名の序奏（後書き）

感想をお待ちしております。

集団（？）（前書き）

この小説には時系列があるようで無い。
それでも読めるように努力します。

集団(?)

夜に街を走るのは、とても気持ちが良い…。特に高い建物から獲物めがけて飛び降りるスリルはたまらないものがある。

僕はネコ…。アンタ達が僕をどう呼ばうと勝手さ。自由に呼んでよ。けれど、僕らは名前という記号を沢山持っている。それは時に僕を指し示し、時に集団を示す。まあ集団のことが多いけど…。

ああ、そうそう…。今日は満月なんだ。

さ…。今宵も一暴れしようか、我が同胞。夜は僕らの庭なんだ。好き勝手に遊ぼうよ。

「そっち行つたぞ！追え！」

「散れ！散れ！散れ！奴らが来る前にガキを人質に取るぞ！」

今、ジュラルミンの小型ケースを持って建物の中の細い道を駆けている。その後ろには傷だらけの怖いオジサンが五人。

簡単に言えば、まあ追われてるって感じ。

向こうは下っぱの悪戯小僧を捕まえて人質にしようとしてるけど、僕が何者かご存知ないようだ。一応、僕がその【奴ら】の『頭』なんだよね…。（と言いつつ、檻褸を纏ってるからわからないと思うけど）

あーあ、かつたるい。本当はこれ、僕の仕事じゃないし…【サンダル】にやってもらはずだったのに…。

あ、【サンダル】ってのは僕の友達。とにかく逃げるのが上手い噛ませ犬役を担ってるんだ。

「くそっ！なんて足の速いガキだ！待てやコラァ！！」

ガキじゃねーし。

飛び掛かるオジサンを道に転がすと僕はゴミ箱を蹴倒した。当然、相手は生ゴミだらけになる。とても滑稽だった。

距離を開け、細い角を曲がった瞬間、壁にぶつかる。

「…！？」

なんで壁が、と思ったら…なるほど、大男が立ちはだかっていた。その後ろは増援か…。

僕は太男に襟首を掴まれて即宙吊りになった。

うへえ。グラグラして気持ち悪！

「観念しろ！クソガキ！」

観念するのは、そっちさ。

仮面の下で舌を出した。

その時だった。

視界の端が光ったのは。

―…ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン…！！

刃物が地面に刺さった。

それは熊手を模した奇妙な形で、柄に取っ手のようなものが二つあ

る。

僕の愛すべき凶器であり相棒……『冥界叫喚』《アンノウンテン
ペスト》。

「な、なんだこれ!？」

「そ、それは……ぐハあ!！」

渾身の回し蹴りからの間接技で大男の腕を折ると、僕は得物を振り
回し、一気に跳躍した。

ビルの壁に足をつけ、ステップの要領で壁をかけ上がる。
屋上には他の仲間が待っていた。

月下に僕を含めた六人のシルエットが綺麗に並ぶ。

「よお猫、おつかれさん……」

仲間の一人が、僕に労いの言葉を掛ける。正直嬉しくもないから無
視無視。

ジュラルミン・ケースを仲間に移して僕はさっさと檻を脱ぐ、す
ると下から特徴的なワインレッドが飛び出た。

そつ、この色は有名だ。

それを見て、下にいるオジサン達はどよめく。

「げ…あの赤は…！」

「おい…今、猫って…？ということは…に、逃げろおおおおお
！！」

「撤退！撤退いいい！」

逃がすかつての…。

さて、一狩り行きますか。

すかさず僕と仲間の一人は飛び降り、そして逃げ遅れたオジサン達の背中に両踵をお見舞いした。

「ぐえ…！」

「くそ！撃てええ…！」

「これだけは死守しろ！絶対…！」

僕達めがけて銃声がいくつも上がる。

そんなものが効くかよ。

頭固いなあ。

僕達は遮蔽物に隠れると弾切れになるまで待つ。

カチッ…カチッ…

「クソッ！ジャムったか！」

どうやら弾詰まりを起こしたらしい。ま、安モンの銃だからね。

ここからは僕達のターンだ。

「オラオラオラあ！！我らが大将のお通りだあ、道開けやがれえ！！」

とたんに僕の弟子が吠えた。

彼はユキヤ。いつかは二代目『ネコ』を名乗るであろう馬鹿弟子だ。ちなみに仲間内のあだ名は『仔猫ちゃん（笑）』。

…恥ずかしいんだけど。

なにさ、大将とか。

まあ良い…片付けよう。

僕は『冥界叫喚』の五枚刃を発射させ、辺りの建物の壁を引っ掻いた。

喰らいな…『雑音棺』（ハウリング・ノイズ）。

不愉快な高音が響き渡る。

そして波のように襲い来る衝撃。敵がよろける。その間をユキヤがすり抜け、相手の頸動脈を斬った。

よし、その調子だ。

僕もどんどん切りつけ、致命傷を負わせる。

その時、僕の後ろからゴミ箱やオジサンが凄^{ひど}い音を立てて吹っ飛んだ。

「ネコ！テメーぶつ殺す！！！」

はっ？何言ってんだコイツ。

僕の反応を意に介さず、サングラスをかけた仲間の『^{だっ}グラサン』は僕に殴りかかって来たではないか！

おいおい勘弁してよ…。

「ひ、ひい…！来るなあ！」

怯えたオジサンが何を勘違いしたか銃を構えた。それがグラサンをさらにイラつかせる。

「邪魔すんなああ！！」

オジサンの顔面に拳がめり込んだ。

うわ、痛そう…。

そして怒りが頂点に達したグラサンは信じられない行動に出た。顔面から鼻血を垂れ流すオジサンA（仮名）の足を掴み、それを振り回したのだ。

「オラオラア……!! 退けやあああ!!!」

グラサンの鬼畜な所業のせいで辺りは修羅場と化した。

お陰で敵は全滅。

息がある奴はほとんどいない。

「次はネコだああ!! よくも俺の髪ちょん切りやがつて!」

見ればグラサンの前髪がほんの毛先だけ無くなっていた。

アホかコイツは……。巻き込まれた奴が悪いだろ。

僕は思わずため息を吐く。そんな僕の空かした態度が気に食わないのか、ギャース力吠えるグラサンを別の仲間二人が止めた。内一人『サングル』はすぐに殴られる。

その間に僕は大きなジュラルミンケースを開けた。中にはギッチリと麻薬が詰められている。

「それか? 最近売られてる麻薬つて……」

さっきまでグラサンをなだめていた仲間『ゴグル』だ。彼はまあ……あれだ、僕の飼育係を任されている。

料理も上手く、お節介なオカン役。

「そう、これが噂の『アムネジア』だ」

ここにきて、ようやく僕は言葉を発した。
それは同時に戦闘状態が解けた事を示す。

「ふうん、じゃあデンプの情報通りだな」

「ああ」

「で、こんな大量の麻薬…どうすんの？」

「燃やすに決まってるだろ」

だって

「この街で麻薬は売らせない」

僕は笑った。

ゴーグルは難しい顔をした。

「もう引き返せねえな」

「ん？」

「これで俺達は『ヤクザ』に喧嘩を売ったことになんだぜ？」

「そうだな」

ことの発端は謎の麻薬が出回った事による小競り合いだ。

五日前に僕らは麻薬の出所を突き止め、その取引に出される品物（麻薬）を破壊すべく出てきた。それが今夜のこと。

僕達『ネコ』は遊び半分で作ったギャングみたいな『自警団』だ。だが、正義の味方ではない。

もちろん悪でもない。

作った動機など簡単で、ただ単に暴れたいだけ。ただ単に走りたいたいだけ。

被害者が全員『裏の人間』ってだけで、やっていることはギャングと違いない。

けれども人々は僕らを『自警団』や『義賊』と『勘違い』した。

この街では警察は信用出来ない。

この街では法律、倫理、常識、道徳は全く役に立たない。

でも僕らは知っている。

この街は『法』なんて必要としないぐらい確かめるまでもなく『終わっている』のだ。

だが僕らが居ても根幹が何も変わらない『この街』を僕らは『愛している』。

すくなくとも夜の『街』は僕の『遊び場』だ。それを麻薬ごときで汚されるのは嫌なのさ。

ヤクザがバックに付いていようと関係ない。

元々ヤクザは僕達を警戒しているのだ。

「それなりの理由はあるのか？」

「あるさ。『遊ぶ』んだ。本気で」

「正気か？」

「正気だ」

「呆れた」

「呆れる」

好きなだけな、と僕は仮面の下で呟く。

「そろそろ頭の硬いジジイ達に勉強させなきゃな、そうだろうに」

この街にヤクザなんて要らない。

『悪』は僕達のものだ。

そうして僕はジュラルミンケースから麻薬を掻き出し山積みにした。

「クロ、燃やしな。皆、息止める。特にグラサン、騒ぐな」

そのゴミにクロと呼ばれた少女は火を放つ。

僕達は息を止めてその場を離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8636u/>

宵闇猫と夜叉鴉の満月狂騒曲

2011年11月13日18時49分発行